

SSU (SHIP SALVAGE UNIT)

2004(平成16)年10月17日鑑賞(新世界国際劇場)



監督=イ・ジョングク/出演=シン・ヒョンジュン/キム・ヨンホ/シン・ウンギョン/リュ・スヨン/イ・イルチェ (日本ヘラルド映画配給/2003年韓国映画/109分)

……『SHOW - HEY シネマルームⅢ』のミニコラムの中で、「絶対に観たい韓国映画」(78頁)と書いた『SSU (SHIP SALVAGE UNIT)』(03年)をやっと観た。「潜水艦モノ」とは言えず「ダイバーもの」と言うべきだろう。男同士の友情をメインにしたのは、日本映画の『海猿』(03年)、『SHOW - HEY シネマルーム 4』115頁参照)と同じ。しかし、軍事的にはよりリアルだし、ラストシーンにおける「究極の選択」は、より悲劇色が強いもの。さて、あなたはどちらが好き……？

「潜水艦モノ映画は名作ぞろい」

『U・ボート』(81年)、『眼下の敵』(57年)、『レッド・オクトーバーを追え!』(90年)など、潜水艦モノにはたしかに名作が多い。

「韓流」大はやりの昨今だが、『シュリ』(99年)、『JSA』(00年)に続く第3作『二重スパイ』(03年)をとりあげた『SHOW - HEY シネマルームⅢ』でも、そのミニコラムに私は「絶対に観たい韓国映画」として、『SSU (SHIP SALVAGE UNIT)』(03年)を取りあげた(78頁)。そんな中、遅ればせながら、大阪は「新世界」の「新世界国際劇場」という映画館で、この『SSU』が3本立て1000円で上映されていることを知り、わざわざ出かけていったが……。

「潜水艦モノ」ではなく「ダイバーもの」

ミニコラム「絶対に観たい韓国映画」では、この『SSU』を「潜水艦モノ」と表現したが、実際に映画を観ると、どうもそれは違うようなのでここで撤回して

おきたい。たしかに潜水艦が登場するし、軍事的緊張も作品の1つの味つけとなっているが、メインは「ダイバーもの」で、日本の「ダイバーもの」の名作『海猿』（03年）と共通するもの。『海猿』が日本の海上保安庁の海難救助隊の潜水士を主人公として描く映画なら、この『SSU』は、韓国海軍の海難救助隊 SSU で、全く同じような役割を担う3人を主人公として描く映画。日本の海難救助隊の自衛隊との共同訓練は、韓国海軍との共同訓練だが、その軍事的緊張感の違いは大きいもの……。

魅力的な3人の主人公たち

「海の底」を遊び場として育ってきたキム・ジュン（シン・ヒョンジュン）とイ・テヒョン（キム・ヨンホ）は、幼い時からの遊び仲間、すべてにおいての好敵手。そんな2人が、韓国海軍に所属する海難救助隊（SSU）に入隊し、ともに優秀な成績で卒業。今や2人は大尉となり、救助班長をつとめている、誰もが認める現場のリーダー。そして、もう1人の主人公は、女性士官のカン・スジン（シン・ウンギョン）。2人と同期だが、イギリスに留学したスジンは少佐に昇進し、新任教官となつての再登場。もちろん映画だから、SSUでの任務遂行という表のテーマ（？）とは別に、ジュンとテヒョンとの男同士の友情と、ジュンとスジン、そしてテヒョンとスジンとの恋愛模様が1つの大きなテーマに……。

新聞での映画・演劇案内あれこれ

新聞各紙には、映画と演劇の案内が載っている。聞くところによると、これに載せてもらうには1日4000～5000円かかるとのことだが、一般市民の広告媒体としては貴重なもの。スポーツ新聞は、この欄がもっと大きく、中にはストリップ劇場の案内もあるが、一般紙にはさすがにそれはない。もっとも、ポルノ映画を上映する映画館はチラリホラリと……。

私は朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、産経新聞、日本経済新聞の5紙を購入して読んでいるが、その案内はそれぞれ特徴があって面白い。トータルとしては、朝日新聞のものが私には1番使いやすいため、これをいつも切りとって持ち歩いているが、そこには大阪の新世界の映画館は載っておらず、これが載っているの

は読売新聞のもの。

ところが、私がよく行く天六のホクテンザ1、2、ユウラク座については、読売新聞や産経新聞にはホクテンザ1しか載っていない。新世界の国際劇場で『SSU』をやっているとの案内を観ると『21グラム』『SSU』『KEN PARK』とあり、大1000円、学800円とある。つまり3本立てで大人1000円ということだと思い、電話して上映時間を聞き、『SSU』と『KEN PARK』の2本を観ることに。

ジャンジャン横町と「新世界」の映画館

地下鉄動物園前駅を下りて、駅員に映画館の場所を聞くと、ていねいに教えてくれたうえ、「大阪地下鉄ええまちマップ」をもらうことができた。そこで、それを見ながら1人でスタスタと通っていったのは、有名な(?)新世界の「ジャンジャン横町」。元プロボクサーで、今は人気俳優となっている赤井英和氏の大好きな「串カツ屋」がここらあたりにあるはずだと思いながら、新世界特有の活気ある(?)雰囲気のジャンジャン横町を抜け、新世界日活というポルノ映画館や、演劇をやっている朝日劇場等の前を通って、「新世界国際劇場」へ。国際地下劇場ではポルノ映画もやっているが、予告の看板を見ていると、いい映画もいっぱい。ついでに周辺をブラブラ歩くと、3本立て1000円の映画館は、他には「日劇会館」、「新世界公楽劇場」などたくさんあり、昔の勝新の映画なども上映していた。なるほど、こういう街やこういう演芸場、映画館がまだまだたくさんあるんだ、ということ再認識!

何十年ぶりの通天閣

『21グラム』は既に観ているし、3本を観るのは時間的に無理だったので、約30分の余り時間を利用して、通天閣へ上ってみた。中学生の時の大阪旅行や、大学生の時に上ったことはあるものの、それ以降上った記憶はなし。600円の入館料を払って、1人で通天閣の上から大阪の東西南北を一望した後、映画館へ。

時間があれば、地下にある囲碁・将棋センターも見たかったし、「餃子の王将」で半額セール中の生ビールを飲み、餃子も食べたかったのだが……。

こんな1人での大阪見物(?)もたまにはいいものだ再認識。これからも

時々、「新世界」界限に出没(?)しなければ……。

SSUでの「お仕事」と緻密に計算されたストーリー構成!

話が大きく脇道にそれたので、映画の話に戻そう。2人の主人公のSSUのダイバー(潜水士)としての最初の「お仕事」は、演習で打ちあげられたミサイルの引揚げ訓練。ところがどっこい、これは訓練ではなく、ホンモノのミサイルだった……。まずはこんなSSU隊員の活躍場面から入り、その過程の中で、男同士の友情とスジンを含めた三角関係(?)模様のストーリーを絡めていく。そして、いったんはジュンと別れたスジンが、少佐に昇進し、再び新任教官としてジュン、テヒョンたちの前に姿を現すところからは、再度視点の異なるストーリーが展開していく。

この映画におけるSSUの「お仕事」のメインは、「ミンク作戦」における事故によって沈没した潜水艦から、生き残っている乗組員を救助し、さらにその潜水艦内に残っている極秘のハイテク新兵器、USMの引揚げ作業。今まで100mしか潜ったことのないSSUの隊員たちが、150mを越える深海に潜ってこの任務を遂行するのは、きわめて危険なもの。さあ、その展開は……?

記録保持者のジュンだが……?

ひょうきん者で、組織の枠の中に入りきらないジュンは人気者で、女の子にもモテモテ。しかしこんなタイプは、官僚的体質の上司(?)とはよく対立するもの。そんなジュンは、潜水能力抜群で、さまざまな記録保持者だが、実はその無理がたたって……?ミサイル引揚げ訓練(?)でも上層部と対立したジュンは、「ミンク作戦」の成功で名を挙げたいチェ中佐の命令による過酷な訓練にも異を唱え、遂に「ヤラセ事故だ!」と対決した。そして、この上司をぶんなぐってしまったジュンは逮捕されて……。

ジュンと対照的なテヒョン

「陽」のジュンに対して、テヒョンはなぜか「陰」の役割となっている。それを「自覚」しているテヒョンは、いつか、どこかで「ジュンの前に行きたい」

「ジュンに勝ちたい」と思っていたが、成績だけではなく、上司との衝突でもジュンがカッコ良く(?)先行してしまうありさま。

そこで、たとえ「ヤラセ事故」であっても、150mの深海への潜水にチャレンジしようとしていたテヒョンは、ジュンによるチェ中佐殴打事件による訓練中止のため、千載一遇のチャンス(?)を逃すことに……。もちろんスジンの獲得合戦では、終始2人は微妙な関係。そんなテヒョンだったが、潜水艦からのUSMの引揚げと乗組員救助作戦で、上層部から意見を求められたテヒョンは、拘束されているジュンの力が不可欠であると訴えた。そして、これがこの映画における、最後の悲劇的な結末を招くことに……?

よくできた友情ドラマの延長としての感動ドラマ!

日本映画『海猿』のラストはハッピーエンドだったが、この『SSU』は悲しい結末で終わる。その悲しさを、際立たせているのが、ドラマの当初からの陽気なジュンの性格であり、幼い頃からずっと続いているジュンとテヒョンとの男同士の友情。この『SSU』は、一躍韓国映画を世界に有名にした『シュリ』(99年)を製作したカン・ジェギユ率いるカン・ジェギユ・フィルムが、再度そのスタッフを結集してつくったもの。もっとも、『シュリ』のカン・ジェギユ監督は、今回は製作とプロデューサーに徹し、監督はイ・ジョングクがつとめているが、『シュリ』でもそうだったように、この映画でも、登場人物の人物像が、非常に鮮明にされているのがいい。

そのため、ジュン、テヒョン間の友情と、そこにスジンを絡めた恋心の動きが、実にうまく描かれており、「感情移入」しやすいドラマに仕上がっている。そして、最後に迫られる「究極の選択」……。ヨン様ならぬ、ジュン大尉を演じたシン・ヒョンジュン様ファンのあなたなら、思わず大粒の涙が流れ出ることになるかも……。もっとも私は、白い海軍士官の制服をカッコ良く着こなしたスジンの魅力に降参するとともに、他方で、女としての感情と弱さを見せるスジンを演じたシン・ウンギョンの演技力に大いに感心。何ともうまくまとめたイ・ジョングク監督の感動作だ。

2004(平成16)年10月18日記